

山桜の里 戸赤

満開に咲いている花豆(7/15)



7/5 集落中央の広場で座学

花豆

栽培講習会

「花豆パイ」

のお披露目



湯田雄二町長の
お祝いの言葉



△戸赤から栽培者の家族など十四名参加「花豆パイのお披露目」道の駅「しもづ」



対面販売でPR(7/7)



好調な売れゆき「道の駅「しもづ」」
期待出来ると思います。(裏)

花豆は「べにばないんげん」と「豆類(種実)」で登録された農薬が使用できることなど学んだ現地指導会(栽培者ら15人参加)



花豆現地指導会 自分の畑 振り返る

花豆の開花盛期(7月中、下旬)に生育を見ながら、チッソ成分で4kg/10a、S646の場合は20kg/10a程度を追肥することなど、管理作業の要点をプリントで勉強した後、畑に入り現地での講習会を行いました。ツルや葉の繁茂、害虫の発生状況など観察し、普及部の指導員からのアドバイスをメモしながらいつもやっている自分の作業内容をもとに情報交換しました。

主催者あいさつ【戸赤区長・渡部利男】高齢化に負けない村づくりに取り組んでまいりました。八年前から力を入れてきた花豆栽培もその一環。栽培技術の勉強会を重ねてきたこともあって栽培面積も増え、今日の商品販売につながってまいりました。村おこしに援助いただいている町や県をはじめ農協、豆加工業者、パッケージデザイナーの皆様にご感謝申し上げます。来賓あいさつ【下郷町長・湯田雄二】私が町長に就任してから十一年になりますが、戸赤の皆さんには就任早々から地域振興という基本政策に廃校利用などで同調して協力していただいております。元気が出ないこの地方にとって地場商品の誕生は明るい話題として良い刺激になります。戸赤の皆さんが頑張っている姿を見ると「消費って消費ない村」ではなく、「元気がつなかつてゆく村」になっていると思います。おみやげはだれでもが裏つぶを気にして買つものですね。この商品の販売者は地元代表者入りなので下郷をPRするのに大いに期待出来ると思います。(裏)

【木地の学術No.21】しからはば太政大臣がどうして小椋の苗字を賜はったことに、説かるゝに至ったかと謂えば、それは土地の名が小椋庄であることも一の原因だが、本来小椋は好ましい苗字でもあった。京都にもこの家名の公卿があった上に、近江では小倉は相応に名家の名であった。「蒲生郡誌」に引いた永源寺文書を見ると、永正、天文の頃に若干の小倉氏が活躍して居る。佐々木の被官としては良い顔であったが、それがまた小椋庄を以って、諸講名字の地にして居たのである。小椋庄の起立は随分古い。「兵範記」の原本保元二年の條の紙背の文書に小椋御庄の名が見え、近衛殿の御領となる前に、冷泉宮領として既にあったらしい。地名は大いに古く、苗字は大いに新しいとすれば、他の原因からこの苗字が出来たとはいはれぬのである。さうしてこの地名は地形から来たもので、他の多くの小倉と同様にクラは巖石のある地のこと、即ち今の八風越の昔の路が岩根を踏んで登る峠であったのが、やがてこの辺の弘い地名になったものと思つて居る。柳田はこの中で、木地師小椋姓はそう古いものではないと示唆している。(津地方歴史民俗資料館「木地語り」より) (つづく)

